■よこはま

横浜鉄橋之図（五雲亭貞秀画、明治3年、横浜開港資料館蔵）。東海道・横浜道に通じる、横浜陸路の玄関口・吉田橋は、鉄道開業以降は伊勢佐木界隈への入り口としてにぎわった

横浜・伊勢佐木界隈は明治時代初期から、横浜市民の「ときめき」を一身に集める町だった。発展した「モダンな町」は、庶民が求める商品や文化を提供し、「イセブラ」の造語も生まれた。140年の町の歴史を14回にわたり振り返る。

ときめきのザキ140年
盛り場の横浜庶民文化

■1

劇場と寄席誕生へ

慶応大火

慶応2（1866）年10月20日、末広町から出火した火事は、横浜の中心部を焼き払う惨事となった。未曾有の大火で、現在の横浜公園に位置した港崎遊廓は、関外地区に新設された吉原町に移転して吉原遊廓となり、さらには山手居留地が新たに置かれることになる。

その後、現在の北仲通5丁目・6丁目に所在した洲干弁天社が、羽衣町に移転、厳島神社となる。北仲通の横浜最初の劇場「下田座」は、「佐野松」と合併して「下田座さの松」となり羽衣町で開業するなど、関外への移転が進んだ。

関外地区の地盤は、なお埋め立てや土盛りが必要で、吉田新田の開発者である吉田勘兵衛家は、自己の所有地を埋め立てる者に永借地権を与えて、外部資金導入を図った。

橘樹郡北綱島村（現港北区）の名主飯田助太夫はこれに応じた一人だった。飯田は明治5（1872）年になって、浅草寺の横浜別院を建設する目的として、浅草の大俠客新門辰五郎に対して借地権を売却している。

吉原遊廓は、明治4（1871）年に再び火災で焼失して、高島町に移る。伊勢佐木界隈の盛り場としての発展は、吉原遊廓の開業と、焼失・移転が大きな足がかりとなっている。

まちの歴史を140年前に遡るゆえんはそこにある。高島町移転後、「下田座さの松」（のちの羽衣座）を中心とする周辺地区が相撲などの興行地区として展開し始め、劇場・寄席の進出が始まるのである。

＝この連載は横浜開港資料館の平野正裕主任調査研究員が担当します。

（火、木、土曜に掲載）

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

情報は報道部☎045（227）01

ときめきのザキ140年

★盛り場の横浜庶民文化

■2

3氏の名が町名に

町割り

明治5（1872）年、「下田座さの松」の正月興行が行われた。河原崎権十郎・市川左団次による忠臣蔵ものの「四十七石忠箭計」で、鉄道に試乗して横浜に乗り込んだ。権十郎は2年後、九世市川團十郎の大名跡を継いだ。

明治7年5月20日、「元吉原町搆堀姿見町裏通埋立町地」の町割りがなった場所を「伊勢佐木町」と命名すると、神奈川県からの布達が出された。

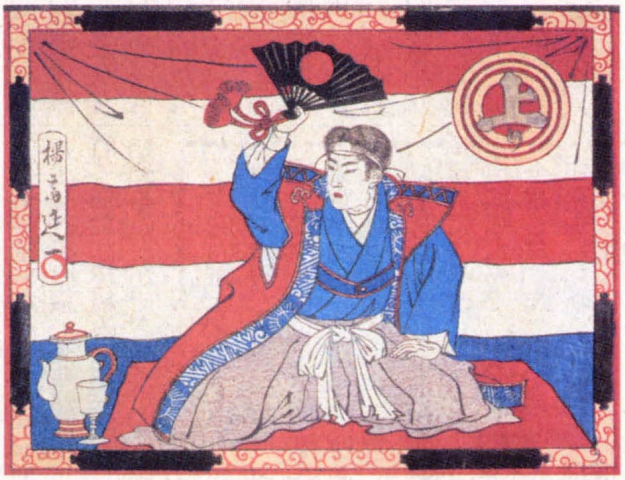
町名は道路建設費として、当時の金額で3千円を寄付した伊勢屋中村治兵衛、佐川儀右衛門、佐々木新五郎の名前に由来し、町の整備に外部資金が導入されたことが分かる。

成立したばかりの伊勢佐木町は、現在の1丁目とほぼ等しい区域で、現在の2丁目は松ケ枝町、3～4丁目は賑町、5～7丁目は長島町。この3町は、明治6年に命名されていた。

伊勢佐木町～長島町の「伊勢佐木町通り」界隈に、劇場・寄席の進出が相次ぐ。明治7年4月の山中座を皮切りに、13年までに増田座（のちの蔦座）、粟田座、勇座、賑座が進出した。関内の吉田橋のたもとに寄席の富竹亭もできて、興行街の様相が整っていった。

明治9年の増田座開業には、新演劇の開祖川上音二郎も、蔦座を関東進出の足がかりとしている。

（火、木、土曜に掲載）



「オッペケペー」を歌う川上音二郎（「おっぺけペー歌入双六」＝部分、早稲田大学演劇博物館蔵）。明治23（1890）年8月、川上は蔦座での政談芝居「明治20年国事犯顛末」を上演したのち、社会を風刺した「オッペケペー」を歌い大喝采を博した

團十郎の成田屋一門が駆けつけてこけら落としに臨んだ。團十郎と並び称される五世尾上菊五郎、初世市川左団次も伊勢佐木にたびたび登場し、若干年代は下がるが、

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞　2010.11.30（木）

ときめきのザキ140年
★盛り場の横浜庶民文化
■3

女性労働者が支え
芝居人気

明治・大正期までの劇場は、座付き役者が日々の興行を担った。時には東京、大阪から名題役者を呼んで「大歌舞伎」ののぼりをあげたが、その場合座付き役者は脇にまわって舞台を支えた。

これに対して、賑町の賑座は地元芝居の王道を歩んだ。横浜には輸出ハンカチーフの縁かがりをする女性労働者「ハンケチ女」が多数存在した。賑座は通称「ハンケチ芝居」と呼ばれたが、これら女性労働者が人気を支えたからである。

低俗と揶揄されながらも、賑座からは関三十郎、市川荒二郎らの地元スターが生まれた。特に荒二郎は、大正から昭和前期にかけて、喜楽座、朝日座、横浜歌舞伎座の舞台を務めて「ハマの団十郎」と呼ばれた。尾上紋十郎、松尾次郎なども伊勢佐木の劇場が輩出したスターであった。

賑座は、明治44（1911）年10月、「橋開市街賑」を上演した。これは11月1日にコンクリートに架け替えられた吉田橋の開橋式が挙行されるのを当て込んだもので、上演とニュースがコラボした作品であった。

賑座「橋開市街賑」の小番付（明治44年10月、横浜開港資料館蔵）。木橋・鉄橋・コンクリート橋の3代の橋を背景に芝居が展開する三幕物の芝居で、原作は横浜の作家佐波錦川であった

横浜を題名に冠した芝居は少なくない。のちの作家長谷川伸が「山野芋作」名で「都新聞」に連載した「横浜音頭」は、連載中の大正3（1914）年4月に横浜座で上演された。これは東京・蓬莱座より3カ月早く、原作の単行本化は実に1年後。芝居には先取りの活気があった。（火、木、土曜に掲載）

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞　2010.12.02（木）

ときめきのザキ140年
盛り場の横浜庶民文化
■4

速やかな復興遂げ

雲井町大火前後

明治10年代、劇場・寄席を中心とする興行街となった伊勢佐木町通りには、客を目当てに多くの店や遊技場ができた。

エリザ・R・シドモアは、明治17（1884）年に初来日し、その後の体験を含めて、明治24年に「ジンリキシャ（人力車）・デイズ・イン・ジャパン」を刊行した。シドモアはそのなかで、伊勢佐木町通りを「半マイルに劇場、見せ物、メリーゴーラウンド、ゲーム、菓子店、レストラン、古着バザー、骨董、玩具、瀬戸物、木工細工の店があり」と記し、そのにぎわいに「中下層の庶民の熱気」を見いだしている。

「横浜商業会議所月報」明治30年1月29日号の「横浜市の遊楽地」は伊勢佐木町を分析した最初の成果と考えられる。吉田橋上での往来遊歩者は5分間に約500人を数え、外来者は少なく「本港民」が多い。

賑町の高所からみた松ケ枝町・伊勢佐木町方面（19世紀末、放送大学附属図書館蔵）「雲井町大火」後、伊勢佐木町通りは8間に拡幅された

日、雲井町（現在の中区弥生町周辺）から出火した火事は、南からの風によって長者町通り以北の、大岡川、派大岡川、吉田川に囲まれた地区を燃やし、さらに賑町を含めて伊勢佐木界隈のほとんどを灰にした。

しかし、まちの復興は速やかだった。伊勢佐木に対する庶民の思いが復興を早めたと考えざるをえない。

（火、木、土曜に掲載）

店舗は、劇場・寄席、空気銃やのぞきからくりなどの娯楽・遊技場のほか、飲食店・菓子食品店、被服関係が多く、その日暮らしの「着倒れ・食い倒れ」のまち、とくに「食い倒れ」の傾向が強い、とする。この分析から導きだされるものは、横浜に働く庶民の盛り場、それが伊勢佐木、との回答である。

明治32（1899）年8月12

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞　2010.12.04（土）

ときめきのザキ140年
盛り場の横浜庶民文化
■5

呉服店 デパート化 客集める

明治16（1883）年、吉田町に開業した越前屋呉服店は、その後店舗を伊勢佐木町に転じた。開港50年祭を迎えた明治42（1909）年5月、越前屋は眺めのよい屋上庭園をもつ鉄骨白れんが造り3階建ての新店舗を増設し、開業5日間で20万人の客を集めた。

新店舗は、ショーウインドーを備え、帯揚げ類、半襟、羽織ひも、化粧品、玩具を扱う「雑貨部」が1階、呉服、太物、帯などが2階、3階は「均一部」で、50銭・25銭の価格均一商品を並べた。この売り場配置は、眺めのよい屋上、ないしは均一価格で買いやすい3階に客を呼び込み、階下に降りてくる過程で呉服等の主要商品の購入に結びつけるという、今日でもデパート経営で使われる「シャワー効果」をねらったものであった。

呉服店のデパート化への歩みは、東京の三越などが先行しており、越前屋もこれにならったものといえる。横浜における呉服店の経営革新はひとり越前屋ばかりでなく、越前屋新店舗開業の半年後に伊勢佐木に進出する野澤屋呉服店支店や、石川町の鶴屋や寿町の相模屋なども、客と店員とが畳の上でひざをつきあわせる座売りから陳列売りに転じ、加えてショーウインドーをもつようになる。

しかし、屋上庭園・眺望というイベント性をもった施設を含んだ売り場配置という視点からすれば、越前屋は他に一歩リードしていたのである。

（火、木、土曜に掲載）

伊勢佐木町2丁目方面から1丁目方面をのぞむ「絵はがき」（明治末期～大正期、横浜開港資料館蔵）左手前が越前屋呉服店。3階建ての屋上とはいえ、当時一般市民が自由に出入りできる展望場は横浜にはなかった

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞 2010.12.07（火）

第3種郵便物認可

ときめきのザキ140年

★盛り場の横浜庶民文化

■6

集客力と各店の進出

野澤屋

「雲井町大火」後の伊勢佐木に、横浜館・帝国商品館などの勧工場がつくられた。勧工場とは、西洋雑貨や時計、小間物、玩具、文房具などを一堂に集めた商業施設である。それなりの水準の高級品・舶来品をそろえたが、10年ほどで消えていった。

明治42（1909）年11月、三越・高島屋と肩をならべる存在ともいわれた野澤屋呉服店が、弁天通の本店に続いて伊勢佐木町1丁目に支店を開店した。絵師・模様師を雇い、独特の珍柄をつくりだす「意匠部」は流行の参謀本部といわれた。伊勢佐木支店開店の際には、「野沢紬（つむぎ）」なる比較的廉価なオリジナル商品が発売された。

同年12月には吉田町の第一有隣堂から分かれて、1丁目に第四有隣堂が進出。大正6（1917）年には、2丁目に文具部を開いている。また、明治45年1月、松ケ枝町のはじけ豆（いり豆）屋のあとに、弁天通の大和屋シャツ店が支店を進出させた。

それまでの伊勢佐木は「興行中心」「食い倒れ」の東京・浅草のようなまちであったが、伊勢佐木町、松ケ枝町に高級品店が進出して、次第に銀座的要素が加味されていった。

Isesakichodori (Theatre Street) Yokohama　ひ賑の町 木佐勢伊濱横

松ケ枝町の大和屋シャツ店支店（絵はがき）（大正期　横浜開港資料館蔵）大和屋シャツ店は現在では銀座で事業展開をしている。伊勢佐木で店舗を展開し、現在銀座に看板を掲げるものとしては、松屋（百貨店／旧鶴屋）や不二家（洋菓子）がある

大正10（1921）年、野澤屋呉服店は、福富町に4階建てのビルを増設して百貨店経営を始めた。その後、元町から洋生菓子の不二家が、関東大震災直後には、石川町から鶴屋呉服店、東京から森永キャンデーストアが進出することになる。（火、木、土曜に掲載）

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞　2010.12.09（木）

ときめきのザキ140年
盛り場の横浜庶民文化
■7

活動写真の"源流"伝来

明治30（1897）年2月、活動写真が大阪において日本初公開された。翌月は関内の港座、伊勢佐木界隈では4月に久方町両国家、5月に蔦座、6月に富竹亭と続いた。

当初は「汽車の到着」や「海水浴の光景」などの単純な実写フィルムであった。その後、戦場フィルムが人気となり、ドラマも作られる。日本での映画製作も始まった。

明治39（1906）年8月、「世界一の馬鹿大将と粗忽な従者との滑稽」「青春男女結婚の邪魔」が喜楽座で上映された。フランス・メリエス社のフィルムで、上映隊「マニラ活動写真会」がアジアのどこかの都市で巡回興行していたものを、日本のMパテー社が横浜に連れてきたのである。

この映画は文芸喜劇大作としては最初のフィルムといわれ、その原作は前者が「ドン・キホーテ」、後者が「セビリアの理髪師」であった。奇妙な日本題が付されたのには、フィルムが巡業隊を通じて世界を駆け巡るうちに、原作とはズレた解釈が生まれたことを証明している。当時は無声であり、誤解が生まれるのも当然であった。

賑町の劇場、喜楽座（絵はがき、明治末～大正前期、横浜開港資料館蔵）。羽衣座に代わって、一流役者を呼ぶことのできる横浜第一の劇場であり、活動写真や浪花節などにも積極的に対応した

海外から純正フィルムを取り寄せ、国内で最初に上映する外国映画封切館オデヲン座が、伊勢佐木町通りに開業したのは、「世界一の…」から5年半を経た明治44（1911）年12月。当時、活動写真は芝居や寄席の人気をしのごうとしていた。

（火、木、土曜に掲載）

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞 2010.12.11（土）

第3種郵便物認可

ときめきのザキ140年

盛り場の横浜庶民文化

■8

松竹と吉本の進出

劇場と寄席

明治期までの劇場は、独立した個人商店のようなものであったが、演劇の世界を制覇しようと試みたのが、明治35（1902）年創立の松竹合名社である。明治後期、京都、大阪の主要劇場を買収ないしは経営した後、東京に進出。明治43（1910）年に新富座、本郷座を買収し、大正3（1914）年に歌舞伎の総本山・歌舞伎座を直営することとなった。

当時、東京の演劇界は、歌舞伎座、帝国劇場、市村座の3勢力があった。相互の役者は同じ舞台にのぼることはできず、役者の組み合わせの固定化が進んでいた。

松竹は、現在の中区曙町にあった二流の劇場・横浜座を買収し、座付き役者を解雇した。そして東京で当たりをとった芝居を持ってきて興行した。また、東京の劇場では同座ができない、歌舞伎座、帝国劇場の役者に同じ舞台を踏ませた。大正5年3月の横浜座興行「十六夜清心」は、歌舞伎座の市村羽左衛門、帝劇の尾上梅幸の両座頭が主役を務めたもので、歌舞伎ファンを熱狂させた画期的興行であった。その後、市村座の尾上菊五郎、中村吉右衛門も、歌舞伎座連と同座はしないものの、横浜座の舞台に立った。

横浜座の「十六夜清心」（『演芸画報』大正5（1916）年4月号、個人蔵）。十六夜（左）が六世尾上梅幸、清心（右）が十五世市村羽左衛門

大阪の寄席に勢力を伸ばしていた吉本興行部が、松ケ枝町の新富亭を買収して「横浜花月」と改称し、関東進出の第一歩をしるしたのは、大正12（1923）年1月。関東大震災で「横浜花月」を失い、15年に再興させる。吉本の横浜への進出理由の解明は今後の課題である。

（火、木、土曜に掲載）

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞 2010.12.14（火）

ときめきのザキ140年
盛り場の横浜庶民文化
■9

連鎖劇に観客喝采

喜楽座

活動写真が芝居小屋で上映された時代、観客は升席に腰を下ろして観ていた。明治40年代になると、伊勢佐木界隈にMバテー電気館（のち敷島館）、紀念電気館（のち喜音満座）、オデヲン座、横浜館などの映画常設館ができ、椅子に腰掛けて観覧するようになる。

旭日昇天の勢いの活動写真に対し、芝居の人気が陰る。明治末から長期低迷状態にあった羽衣座は、大正4（1915）年の火災で再興できず廃座に。賑座も同年朝日座と改称して、翌年映画館に転じた。劇場としてただひとつ元気な喜楽座に、羽衣座新派役者の松尾次郎や、賑座旧派の市川荒二郎らが集結していった。

喜楽座は、大正4年から6年にかけて連鎖劇を本格的に展開した。連鎖劇とは、芝居の流れのなかに映像を入れてドラマ性を高めるものであるが、喜楽座のそれは、実演と野外で撮影したフィルムとが時に半分半分と、フィルムの比重が大きかった。特に座付き役者による連鎖劇は、本牧花屋敷や有名料亭の入り口、伊勢佐木町での追跡・立ち回りなどのシーンを含み、観客の喝采を浴びた。

スタジオ内で映画が撮影されることが支配的であった当時、喜楽座の連鎖劇はおなじみの横浜名所をふんだんに取り入れた、今日でいうロケーションに比重を置いた〝演劇〟であった。しかし意欲的な喜楽座の連鎖劇は、専用映写室を持たない施設でのフィルム興行を制限した警視庁令の影響で、大正6年半ばで終わりを告げてしまうのである。

（火、木、土曜に掲載）

長者町から見た賑町の絵はがき（大正中期、横浜開港資料館蔵）。右手奥が、大正4（1915）年、花道を着脱可にして、升席を椅子席に替えた喜楽座。左手前の大看板はオデヲン座、その後ろが又楽館

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞 2010.12.16（木）

神奈川新聞

ときめきのザキ140年

★盛り場の横浜庶民文化

■10

文化発展の拠点に

野沢屋

明治末期、伊勢佐木界隈の主要な呉服店では、「陳列売り」や「ショーウインドー」、顧客を店内に誘導する計画的な売り場配置を採用し始めたが、身装品以外の多様な品ぞろえや、催事場を利用した文化の発信という後のデパートの要件を備えたものはなかった。

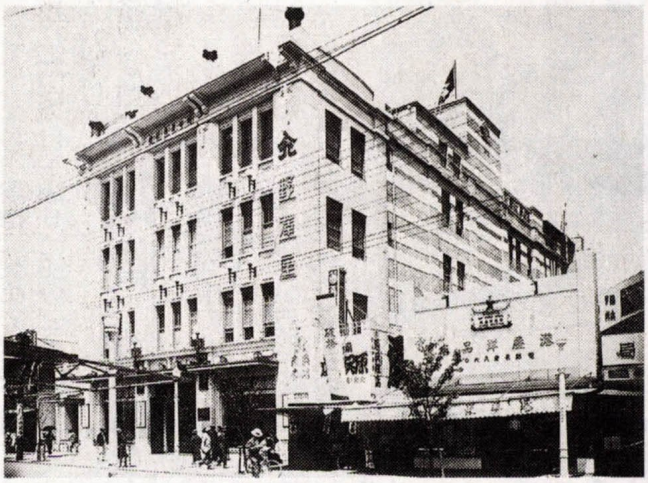
生糸商から発した総合商社・茂木合名会社は大正9（1920）年、恐慌で破綻。呉服店部門のみが翌10年に株式会社野沢屋呉服店として再生し、伊勢佐木町通りの店舗に接して福富町に4階建て（一部5階）のビルをオープンさせた。

その売り場には、小間物・帽子・傘などのほか、家具装飾品、陶磁器・漆器・銅器、食料品、草花盆栽が置かれた。イセザキに名実ともに備わった「百貨店」が誕生したのであった。

福富町の店舗ビルは、大正12（1923）年9月の関東大震災による倒壊を免れた。大正14年、5階の催事場では、横浜の震災復興に尽力する名士たちの書画を集めた「浜自慢名士書画会」が野沢屋主催で開かれた。また、ヨコハマお伽会主催の「こども会」や、横浜の若手画家による絵画展「浜交会」「津登比会」にも会場が提供された。公会堂の開港記念会館は復興工事中で、今日のように町なかにギャラリーがある時代でもなかった。

デパートは、ただモノを売るだけの存在ではなかった。文化の発信主体として、横浜で最初に名乗りを上げたのはイセザキの野沢屋であった。

（火、木、土曜日に掲載）



昭和2年に撮影された野沢屋呉服店。震災で倒壊した伊勢佐木町通りの店舗は仮店舗を経て5階建てのビルに生まれ変わり、福富町の店舗ビルと接続した（伊勢佐木町1・2丁目地区商店街振興組合蔵）

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞 2010.12.18（土）

第3種郵便物認可

ときめきのザキ140年

★盛り場の横浜庶民文化

■11

モダンガールが登場

洋装化

日本人が日常、洋服を着ることになってから久しい。しかし大正期までは軍服や、警官・裁判官、学校などの制服が中心で、成人は基本的に和服であった。それでも部分的には、女性は日傘やショール、男性は帽子やステッキなど、洋装化は少しずつ始まっていた。

昭和期に入ると、着やすさ・洗濯のしやすさから女性の夏服「アッパッパァ」が普及するが、きちんとしたスーツは高価で、気軽にファッションとして楽しむ水準ではなかった。

野沢屋のカタログや店舗案内で確認できるかぎり、昭和初期に既製服があるのは子ども服であった。成人はオーダーメードで、スーツの仕立てを促すダイレクトメールには服地の小切れが添えられていた。それでも雑誌の記事や、映画の外国人スターや洋装の日本人スターなどにも刺激されて、洋服を作る人口は確実に増えていった。

昭和10（1935）年ごろには、雑貨金星会と称した流行モードを紹介する催しが野沢屋で持たれるようになる。そのパンフレットに描かれた洋服は、モダンガール（モガ）を自任する女性たちも胸をときめかしただろうと思われるほどハイセンスであった。また、外国人アドバイザーを招いての「洋装相談会」も持たれた。

今日では死語ともいえる「一張羅（いっちょうら）」。とっておきのスーツのほかに、さまざまな洋服を取り換えつつ楽しむ生活は、雑貨金星会の洋服にときめいた世代の、さらに子どもの世代。既製の子ども服を着せられた世代が戦後になって享受したものであった。

（火、木、土曜日掲載）

野沢屋「雑貨金星会」のパンフレット（昭和10年ごろ、添田有道氏蔵）。デザイン帳をそのまま印刷したような女性たちはほぼ「10頭身」。当時の日本人とはずいぶんとかけ離れた体形で、どれだけの者がこのデザインの服を作ったかは分からない

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞 2010.12.21（火）

ときめきのザキ140年

★盛り場の横浜庶民文化

■12

『外部資本』が進出

森永・松屋

大正12（1923）年9月の関東大震災で廃墟となったイセザキに、最も早く参入した企業として東京の森永製菓がある。翌13年1月に伊勢佐木町入り口に、国内4番目の直営店「森永キャンデーストア」をオープンさせた。

また3月には吉田橋際の旧伊勢佐木警察署跡に、石川町亀の橋から鶴屋呉服店が移転した。集客力を持つイセザキには、復興の過程でさまざまな店が集まった。中華街の老舗・萬珍楼も進出している。

鶴屋を経営する古屋家は、東京今川橋の松屋呉服店も経営していたが、大正14（1925）年、銀座にデパートを開業した。現在の銀座松屋である。松屋は昭和5（1930）年、吉田橋鶴屋の敷地に松屋横浜支店を建設して先行する野沢屋と競り合った。加えて、越前屋を昭和9年に買収し、鶴屋として再開した。

しかしデパート二つを松屋が所有することへの風当たりに配慮して、1カ月後には壽百貨店に商号を変えた。壽百貨店は、戦時中に軍に供出された松屋横浜支店の名称を引き継ぎ、現在ではエクセル伊勢佐木となっている。

森永は自社の菓子をチェーン店網「ベルトライン」を通じて販売した。森永のチェーン展開は巧みで、加盟店は宣伝販売員の派遣やディスプレー用品のあっせん、キャッチコピーの提案など、手厚い指導が受けられた。

「森永スキートガール」「キャラメル大将」などの宣伝販売員が加盟店の店頭に登場するや、にぎわいを呼んだ。外部の資本がイセザキの集客に花を添える時代になったのである。

（火、木、土曜日掲載）

花見せんべい店頭に登場した「キャラメル大将」（昭和9年ごろ、小宮淳宏氏蔵）。森永の宣伝販売員「キャラメル大将」は、身長213㌢で、子どもたちに大人気であった

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞 2010.12.23（木）

ときめきのザキ140年
盛り場の横浜庶民文化
■13

週ごとに新作公開

映画黄金期

関東大震災後のイセザキに、本格的な劇場は復興しなかった。対して映画館の復興は、総じて速やかであった。映画が伝達する文化の力は圧倒的で、モダンな都市生活や自動車のスピード感などはスクリーンで疑似体験できた。

映画の番組はほぼ週替わりで、封切館から、二番館、三番館…とフィルムが渡り、渡っていくごとにフィルムの傷は増え、伴奏音楽や活動弁士の質が落ちていった。しかし入館料は下がり、観客は懐具合に応じてシネマを楽しんだ。

外国映画の一流館から、日本映画の封切館、ニュースと短編アニメの「ニュース映画館」まで存在したイセザキは、まちがまるごとマルチ・チャンネルであった。

大正前・中期に洋画封切館として高名であったオデヲン座は、震災後は映画輸入会社と結んだ一流館の後塵を拝するが、フィルムを複数本輸入できた場合の同時封切館で「1・5番館」というべき存在となった。それでも横浜一流館の面目で、番組のプログラム「オデヲン座ウィークリー」の発行に力を注いだ。

当時プログラムは入館者に無償で配布された。「オデヲン座ウィークリー」は、時代や映画の内容にもよるが、ふんだんに写真を取り入れたぜいたくな作りで、東京の映画館が発行するものを内容的に凌駕した。

今日横浜開港資料館に残る「オデヲン座ウィークリー」は、昭和はじめのシネマ黄金期の息吹を伝えている。

（火、木、土曜日掲載）

「オデヲン座ウィークリー」599号・664号（昭和11年6月4日・同12年9月1日、故六崎彰氏寄贈、横浜開港資料館蔵）。左は日本画家中島清之が描くドックの光景。右はフランス人俳優モーリス・シュバリエを描いたもの

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045(201)2100。

■神奈川新聞社提供

第3種郵便物認可

ときめきのザキ140年

★盛り場の横浜庶民文化

■14

市民の後押し必要

街再生へ

国家総動員の掛け声のもと、消費や娯楽が敵視された時代があった。盛り場イセザキから灯が消え、太平洋開戦以後はオデヲン座の上映も、日本映画と同盟国のドイツ映画が中心となり、経営も松竹の手に移っていった。空襲がもたらした被害も大きかった。

それまでは大火・大震災をものともせず復興したイセザキであったが、空襲に続く、米軍による接収は、復興を遅らせるくさびとなった。

野沢屋、松屋、不二家などの主要ビルばかりでなく、カマボコ兵舎群（福富町）や飛行場（若葉町）などの敷地を含めて接収は実に広範囲に及んだ。

米軍による占領政策が終了し、昭和30年代のイセザキは再び横浜市民にとってなくてはならない憩いの場として戻ってきた。それから半世紀以上がたつ。近年、デパートと映画館の集客装置を失い、イセザキの地盤沈下がいわれている。

それでも、横浜市民のイセザキに寄せる思いは残る。今回の企画展示に対する市民からのお叱りの多くは、「自分の知っているイセザキは違う。もっとすばらしいもの、ときめきに満ちた場所なのに…」というものである。そのとおりだと私も思う。展示が表現できる世界はちっぽけなものだからだ。

ときめきに満ち満ちたイセザキを取り戻すには、どのようなまちにしたいのかという地元の明確な展望を横浜市民の熱い思いが後押ししなくてはならないと考える。

＝おわり

（この連載は横浜開港資料館・平野正裕主任調査研究員が担当しました）

年末を迎えたイセザキの夕べ（昭和33年12月、廣瀬始親氏撮影・寄贈、横浜開港資料館蔵）。これからどこに行こうとしているのか。夕暮れのまちあかりが市民の思いを包み込む

横浜開港資料館で2011年1月30日まで、企画展「ときめきのイセザキ140年」が開催中。問い合わせは同館☎045（201）2100。

■神奈川新聞社提供

神奈川新聞 2010.12.28（火）